

栄原先生の講演を拝聴した。彼は大阪市立大学の名誉教授だそうだけれど、オレとは十歳代の同級生、くえいえんおとこ>と当時覚えていたので、いまだに姓名の読み書きがさだか、栄原永遠男（とわお）という。いっしょに油絵なぞを描いていた、薄暗い色調、茶色系、灰色系の色を使ってビルのある風景を描いていた「上のほうに行くほど すぼませる これで構図が安定する」なんてことを言っていた。当時、図画の教科書かなにかにそのようなことが書かれていた「あれをねらっているな」なんて理解していたが、もう遠い昔の話、おぼろげに油絵でビルの街を描いた画面が目には浮かぶだけ。同じ同窓の奥さんに「専門は何」「古代の経済」と聞き、これ以上聞いてもわからない、今の学問は細分化されすぎ、聞いたところでこれはお手上げだという場面が多い。講演後、数人の友人たちとのビール会では、日本の平城京前後が専門のようで、我々素人にもわかるようには話してくれた。

今回の講演題目は「難波の宮（難波長柄豊崎宮）はどこまで姿をあらわしたのか」先生：「本当にまだまだわからないことがいっぱい」という。半世紀前、十歳代のころに山根徳太郎先生の講演を聞いた。山根先生が難波の宮を発見した。難波の宮があるということは日本書紀に書かれていたが、どこにどのような形であるのかその当時までわからなかった、幻の宮だった。山根先生は大阪城南側、太平洋戦争時に陸軍省敷地辺りから出土した瓦を見て、ここだと確信し探し当てたが、都会の真ん中、ビルと道路では今も進行中の発掘が進まない。

今、歴史年表を開いても、難波の宮 645 年は載っていない、それ以前の都の名前も場所も載っていない、なのに四天王寺 593 年、法隆寺 607 年、という数字は並ぶ。当時のこと、栄原先生がいうように「本当にまだまだわからないことがいっぱい」が正解で、近代から太平洋戦争までの皇国史観が、日本書紀、古事記という唯一の文献をたよりに作文を作り上げてきた、我々はそれを教科書で習ってきた。教育というものは恐ろしいもの、熟年になる最近まで教科書を信じてきた、今も年表を見るとオレが習った教科書と同じことが書いてある、書いてはあるが色々ところで実際におこなわれた発掘調査、発見された資料、古墓、のことも書いてある、「本当にまだまだわからないことがいっぱい」とは書けない手前、どれが本当で、どれが怪しいか、はっきりしない部分が多い。日本書紀、古事記は神話と史実が混じっている。皇国史観はまだまだずっしり重い。

◎まずわからないこと：大化の改新という有名な話も日本書紀だけの記載だそう。これが本当だとしても、これを考え、実行し、人々に広めた機構、場所、組織、建物、人数はわかっていない。都はどこにあったの。難波の宮という立派な都が突然できるわけがなし、遷都があったとしても、それまではどこにあったのだろう。明日香に立派な都の建物があったのだろうか。

◎山田寺、四天王寺、法隆寺はだれが立てた、だいおうはいたのか、どこに、名前は。天皇はいなかったのか。

◎中百舌鳥古墳群、あのでっかい古墳（仁徳天皇陵）はだれの墓。遣唐使、中国・朝鮮との交流はだれがした。

学者が調べてもわからないこと、素人がとやかくいっても仕方がないが、不明なら不明といえればいいのにねえ。

講演：難波の宮には、前期と後期がある。確定ではないが、前期は 645 年に完成し 689 年に大火で全焼するまでの 35 年間。難波遷都によって造られ、天皇（だいおう）の居所である内裏、政務・儀式をおこなう大きな建物、幾多の役所建物が、“掘っ立て柱”形式で建てられ、瓦は一切使われていなかった。掘っ立て柱形式で建てられ、猛火で全焼したのが幸いし、発掘で、位置、建物の大きさ等が推定しやすい。火事も日本書紀に記されている。左右に八角形の建物があったが、形が世界的にもめずらしく、何の建物か不明らしい。古代、あの辺りは丘のてっぺん、前後左右が落ち込んで、てっぺんからは何も出ず、前後左右の谷から遺物が出るらしい。今では想像もできない坂のある都会だが、てっぺんだの谷だのと聞くと、こんもり膨らんだ丘、水がちょろちょろ流れる谷、それが大阪の元々の地形だったのかと想像できる。消失してから 40 年経った 726 年に後期難波の宮の工事が始まり 784 年長岡京に遷都するまでの 60 年間、宮として存在したが遷都とともに廃止になった。後期難波の宮も前期と同様、立派な建物が建てられ、役人がいる役所の建物もたくさんあった。だれもが知る、教科書に載っている平城京は、710 年から長岡京遷都まで存在した。ふたつの都がある「複都」政策だそう。平城京が 74 年間、後期難波の宮が 60 年間という数字だ。

またまた福岡ハカセの登場：DNAは生命の設計図である。それは、DNAにタンパク質の情報が書き込まれているという意味である。つまりDNAはたんぱく質の設計図である。DNAの実態は、ヌクレオチドという化学物質が繋がり合った高分子、つまりデオキシリボ核酸（DNA）である。そしてDNAの情報がリボ核酸に写し取られ、RNAの情報をもとにタンパク質が合成される。コンピューターの文法は二進法である。たった二つの数字、0と1だけで膨大な情報を処理している。二進法では八桁の数列がとりうる順列は、二の八乗、つまり、二五六通りである。DNAも実にこれと同じ方法で情報を担っていた。下等な大腸菌から高等な哺乳動物まで同じような構成がされている。数千万ともいわれる生物の多様性が、すべて単一の生命の起源から出発した進化の産物であることは、DNAとたんぱく質の文法が単一であるというこの事実が明確に示している。

DNAの話は聞いたことがある、何年か前に、DNAが発見された、DNAを解明している、どんどん解明が続いている。「ヒトのDNAも ネズミのDNAも ある程度わかったが さほど変わらない ヒトと ネズミの差が こんなに少ないとは」というようなニュースもあった。「私たち 子ども時代、試験管など さわったことがない」仲間の話はずんだ。学校には、化学実験室、大きな望遠鏡、顕微鏡などが置かれた部屋はあった。実験室にはアルコールランプ、石綿が敷かれたコンロ、ガラスのビーカーや試験管、顕微鏡を見るためのガラスのプレパラート、ふれたことがあるある器具の名称がすらすら出てくるが、そういう経験も一、二度しかなかった。カエルやネズミをメスで切り刻んだことがあると豪語する女のヒトいたけれど、オレにはそのおもいではない。理科の教科書を読み習った合計時間は相等あったように思うが実験をした時間は少なかった。科学離れという言葉を聞くが、実験というおもしろい作業がなければ、こどもの気持ちが理科からはなれていくと思う。音楽や絵も同じで、何年か前に講師で通った中学校でも、美術の授業は1時限：50分がポツリと一コマだけだった。こどもたちはシャープペンシルしか持ってこない、絵を描く材料は何も持ってこない、「こんな環境で何ができる」と驚いた。何人か絵の具を持った子どももいたが、絵を書くための準備と後始末の時間を差し引くと、20分30分しか描く時間がなかった「これで美術の授業か こんなことでは美術が楽しくはならない」と痛感した。オレの子ども時代は絵や音楽の授業は、二時限：ふたコマが普通だったので。「芸術関係の授業は 息抜きの時間 受験勉強のあいまの時間か」と疑問に思う。日本国がそう決めている「金が儲からないものは いらねえ」とは大きな声ではいわないがそうかもしれない。

フェアブルの話が出てくる。この時代の話になると、現代のDNAや分子の話に比べ、わかりやすくほっとする。フェアブルの研究室で一匹の蛾が羽化した。彼はこのメスの蛾を金網のゲージに入れておいた。するとその日の夜9時ころ、何十匹ものオスの蛾が集まってきた。フェアブルは彼らを観察し推理する。

「つまり、婚礼の宴に招待されたオスたちは、人間の物理学にとって既知の、あるいは未知の、何らかの光の放射を頼りに探知するように、目的物のほうに真っ直ぐ向かうのではない、それとは別の何か、遠くからオスたちにそのモノの存在を教え、その場所の近くまで導き、そして最後はあまりはっきりしないまま、捜し求めたり迷ったりするのにかかせるのだ。人間もまた、聴覚や臭覚というあまり鋭くない感覚を頼りに、どこで音がしているか、どこで匂いがしているか正確に突き止めようとするときは、だいたいこんなふうである」〈フェアブル昆虫記〉フェアブルは他の種の蛾も使って、様々な実験を行い、それが匂いであることを突き止めた。

ハカセの話は、2.3のおもしろい話が続く。

◎100年近く前に、ドイツの学者が、50万匹の蛾を羽化させて12mgの性誘引物質の抽出に成功した。

◎日本のクモ研究学者の話。ナゲナワグモというクモのグループがいる。名のとおり、自ら吐き出した糸の先端に粘液の球をぶら下げ、獲物が近づいてくると振りまわす。粘液の球に獲物がくっつくと糸を引き上げ捕食する。クモに捕食されてしまうのは、ある種の蛾のオスばかりだったのである。いったいなぜそんなことになっているのか、クモが作る粘液球には、オスの蛾を誘引するメスの性フェロモンと類似の物質が含まれていたことがわかった。

今日もやって来ました。“安威川河川敷”ここは舗装がしてある「歩くところですよ」という意味なのかレンガ色のコンクリート舗装、法面は（のりめん：人工的な盛り土の斜面）二段になっている、河川敷をはさんで、下は水が流れるところまで、上は土手の上まで、ぼこぼこ凸凹のコンクリートブロックが両方ともに貼ってある、河川敷の遊歩道には、落ちないように柵が、コンクリート製疑木の杭、鉄の鎖がつづいている。

昔の絵図では、ここよりはるかに水量の多い淀川の土手でも、ヒトの背丈かその倍ぐらいの土盛り。船着場に船が着き、とんとんと木組みの階段を上ると、街道があり、茶店があり、荷を乗せた牛車、旅の男や女、村の子が遊ぶ姿、そんな絵を見たことがある。この安威川も百年前ぐらいまでは左右に人の背丈ぐらいの土盛りだと想像する。普段は巾10メートルぐらいのきれいな流れ、無理をすれば、尻をからげたら渡れるぐらいの川だが、ひとたび大雨が降ればどっと水嵩が増し、水が溢れ、左右の家屋敷田畑を押し流し、水が引けば山からの土砂の堆積物、地図を塗り替えるように、川の蛇行の場所も変わる、というようなことが何度もあったのではと想像する。

オレがよくいうところの“地球の形”川もくねくね流れにまかせ右や左に好き勝手に流れていく。河川敷の中もその曲がりぐあいによって違う、遊歩道だけで精一杯のところもあれば、遊歩道じたいを川の流れとは関係なく蛇行させないと様にならないというような広いところもある。中の島もある、ワンドもある、そこは草ぼうぼう、今の時期はススキ、葦、芦といった類はまだ枯葉状態、新芽さえ目に付かないが、ほかの草たちは日に日に大きくなっていつている。何種類かの草、知っている、見たことがある、これは見たことがない、こんなヤツは初めてだ、と様々だが、夏に向かってますます大きくなり盛夏のころには人の丈を越す草むらに、ところどころに木も育っている、大きい木は見上げるぐらいの大きさ、そんな草木をこれまた覆いつくすように、葛の葉がはびこる。葛がはびこりだすと東北蔵王の樹氷のような大きさ、暗がりで見るとモンスターか恐竜のような様になる。

5日前に多少激しく降った。その日は橋を渡って高槻方面で教室がある日、朝出発の前にこの激しい降りではとカッパの上下を着こみチャックを締め、帽子の紐も締めた。家をでる前から屋根にたたきつける雨音が激しい、20分も自転車に乗れば全身ずぶぬれ、ポケットにタオルを入れ出発した。橋の下を見ると黄色く濁った水はまだ河川敷には届いていないが、「時間の問題かな」と。帰りの昼ごろ多少降りが穏やかになっていたが、下を見ると水嵩は河川敷を少し越えていた。この辺りの小学校は入学式なのか、正装した子どもとお父さんお母さんが傘をさして歩いていた。5日も経って河川敷の舗装もほとんどのところでは乾いている、ほこりっぽく白い砂が舞い上がる。大きく曲がっている部分はまだ土手がたっぷり水を吸い込んだのか、じわりじわり、水がにじみ出て舗装部分をぬらしている。

安威川ダムがもうすぐできあがる？安威川ダムができると市民生活もバラ色、楽しい、素晴らしいことがまっていると、楽しげなイラストが描かれた広報誌が何度かポストに配送された。「ダムの寿命も50年 たかだかしれている100年も経てば 川も 人も 無くなっているかもしれない」なんて考えると「なんでも 好きに しろ」と開き直れるが、いずれにしろ、ダムはいやだね。同様腹がたつのが、関東一極集中の政策。関東にあらゆるモノを集める、その他の地方は、金太郎飴政策、どこの場所に行っても、同じような道路、川、公園、店舗、建物ばかりになってきた。このような政治を日本国民が選んでいる、望んでいる、政治家も官僚も国民の意見に背を押され、ケタイな方向に、色々なことがおかしな方向に流れているんじゃないかと腹がたつ。この話はもっと考え整理してからいおう。

途中のベンチにやってきた。正月明けのまだまだ寒いころ、ベンチのそばにある背丈の倍ぐらいの灌木、その枝々にゴマ粒ぐらいのやや緑色をおびた黒い塊りがたくさんついていた。さわると堅い「何の芽かな 葉っぱになるのか 花になるのか」と思っていたが、今はもうその木に若草色の葉っぱが茂っている、ちぎって指でもめば擦り切れてしまいそうな初々しい若葉、天に向かって光合成をしているのか、その鼻息は聞こえないけれど。

<民衆史の遺産>という本のシリーズ<山の漂泊民>という一冊に“木地山”が出てくる。3年ぐらい前に初めて木地村を訪れ“若狭駒ヶ岳”を登った。琵琶湖を中心にしていうならここは湖西、その以前には何度も湖東の山々を登っていた、山の上り口まで車で走るが“君ヶ畑”という地名のところに“木地師の里”とかかれた看板がかかっていた。轆轤でも挽くみやげ物屋さんかと思っていたが、後々「全国の木地師の一大故郷 大元締め場所だ」となにかの本に書いてあった。君ヶ畑の細い道は御池岳に急ぐために大急ぎで通過ばかりしていたが、それほどたいそうな建物もなく、何軒かの村に粗末な家が建っていただけのように記憶するが、最近では君ヶ畑方面はご無沙汰している。

明治の初め、飛騨地方誌の中に、木地屋のことがかなり要領よくまとめられている。

木地師：飛騨三郡の村々の深山に住み住所を定めない。トチ・ブナ・ケヤキなど木を伐り倒し、それを椀形にくりぬき、小屋で椀木地を挽きながらそこに住む人たちを木地屋とも木地師とも呼んでいる。それはこの小鷹狩郷の山ばかりでなく、小島郷・高原郷・大野郡小八賀郷・小島郷・白川郷・益田郡阿多野郷・馬瀬郷などの村々の人気のない荒山に住み、用材のある間だけは、年々椀木地を挽き、高山・古川そのたの卸店や、仕入れ商人へその木地を送り、代価を毎日の暮らしに必要な米・塩にかえるといったことをして生業としていた。5, 6年も過ぎて山中の用材を伐り尽くしてしまうと、また他の山に移っていき、一生を同じ山で住み果てるということはずまない。商人はその木地を紀伊国海士郡日方へ送って売りさばいた。日方は和歌山から一里ばかり南の、黒江と並んだところにある。「紀伊国名所図解」にも、その黒江椀の図が載っている。現在この飛騨の国の山々で仮住まいしている木地師とかその山小屋の数は確かめることができない。先祖は惟喬親王にお仕えしていた小椋大臣で、その子孫だから彼らの名前はすべて小椋何某というのだそうだ。彼らを支配する役所は近江の山奥にあるらしい。昔は木地師は親の代がわりに、かならずその役所に行って、烏帽子・直垂着用の免許を受けたものといわれている。木地師は深山の山小屋で陽に当たることもないので男女とも色白で、足腰が大きい。色白で腰の大きい女を「木地屋の娘」といったりする。

難波の都・平城京・平安京、というように天皇を中心にしての歴史もいいが、尻のでかい女を「木地屋の娘」というように、漂泊する山の民、修験者、鉾山師、獵師、もの怪の話、鬼の話、霊魂の話、山賊、狼と並べると怖がりのくせにぞくぞくする。小心者がゆえに、農民、良民にしかなれなかった、反旗だ、放浪だ、というような大それたことはできなかった裏返しかもしれない。もっとも生まれたときから「君はこの階級 上には行けない 下にはいけるが」という縛りがあれば、唯々諾々「従わねばなるまい」と頭を下げていただろう。人権問題と絡め、このような話に興味がある。最近よく行く木地山に関して、大昔の話がでていたので紹介します。研究者の弁だけれど、真実はわからない。疑問は、漂泊の民がここ木地山では、何百年も定住したのだろうか。

針畑（ここも最近よく通る 芦生や遠入峠 百里ヶ岳への道）と同じ山続きに木地山の集落がある。木地屋の村ですが、今は過疎化で10軒もない。300年以前の記録では50軒ぐらいの木地屋が居たそうですが天明の飢饉で多くの家が死に絶えそれ以来増えもせず今にいたっています。この辺り轆轤・木地という地名がある。なぜこの辺りにこれらの人が漂移してきたのか。奈良東大寺造営時の話になります。東大寺の造営には石山寺が監督をしていたが、この辺りは現場・飯場のようなところでした。山作所といった。そこで奈良東大寺造営のための木を伐りだした。安曇川で筏を組み、琵琶湖、宇治川、木津川、木津で陸揚げをして、奈良坂を越え造営現場まで運んだ。ところが東大寺の工事が終わると、山作所で働いていた轆轤工たちが仕事をするために奥へと入った。まず小椋栖山の大鉢山で大鉢を作った。もっと奥、麻生谷を越え、最後に留まることになったのが木地山でした。

今でも木地師が造った木工芸品は百貨店の美術サロンに行けばいつも観られる。木の目が見える透明な塗りもいい、漆をぶ厚く塗ったものもいい、が、なかなか高価ゆえに手が出ない。百貨店の工芸サロンの話になると面映い。絵は百貨店の美術画廊は「パンの世界」と遠吠えするが、「パンの世界」この言葉は、解説はしないよ。

栄原永遠男著<聖武天皇と紫香樂宮>図書館で「おお トワオさんの本だ」とさっそく借りた。先日彼の「難波の宮」の講義を聞き、嬉しくなっていたところに書架の本と遭遇、2年前の発行なので在ったはずだが気がつかなかった。講義で当時の歴史は「本当にまだまだわからないことがいっぱい」というていた。あの時代の日誌でも存在すれば、ヒトやものの動きがわかる記録があれば、歴史はできあがる。この日になにがあり前日にはこれがあつた、またその時どこになにがあり、別の場所ではこれがあつた。天皇はどこにいた、家臣は何をしていた、敵はどう動いた、それこそ人のうごめきをつかめば歴史はできあがる。5W1H (wen いつ・where どこで・who だれが・what なにを・why なぜ・how どうした) というパズルをどう埋めていく、今まで大雑把に“日本の歴史”としてきたものを、その隙間を埋め、間違いを正し、少しでも真実に近づける、より歴史に近づける作業なのだとも再認識。

トワオ先生：(本当は栄原先生というべきところだが、オレなりに呼びなれた名まえでゴメン)：天平時代の後半期、天平12年(740)～17年(745)の5年、聖武天皇は居所をつぎつぎ移した。平城宮を振り出しに、恭仁宮(くにのみや)、紫香樂宮(しがらきのみや)、難波宮(なにわのみや)の間を移動してまわり、最後に平城京に戻つた。この間に恭仁宮と紫香樂宮が新たに造営され、国分寺建立の詔と大仏造願の詔が発せられた。<オレ：恭仁宮とはどこ、地図を開くと木津の鹿背山あたりが中心と書いてある、わが友人の水島兄弟の住まいしているあたりが都だったのかとまずはびっくり。紫香樂宮もタヌキで有名な信楽市街地よりやや北のあたりだと発見。>

トワオ先生：考古学では、遺構の時期は、土器・瓦その他の遺物の年代によって決める。ところが宮町遺跡(紫香樂宮の一部)では、古代の瓦は出土しない。そこで土器その他に頼ることになるのだが、その形式編年では、1年きざみで前後関係を明らかにすることは難しい。そこで、年紀のある荷札木簡に注目したい。荷札木簡とは、荷に付けられた木の札である。調・庸などの税の費目、たとえば煮堅魚(かつお)・塩などの品目と数量、それを負担した個人名、その個人の所在する国・郡・郷などの地方行政単位、そして、どの年度の税なのかを示す年紀。<オレ：なるほどこういう伝票がでてくれば、日時、ヒト・ものの動きがよくわかる>木簡の話：木簡やその削屑は、通例、泥に含まれて出土する。泥ごとケースに入れ、調査事務所で水洗いして、遺物を拾いだす。木簡のほか、植物の種子、土器片、加工木片その他がでてくる。<オレ：土器や金銀細工、美術的価値はあるが、文字、記録が出てくればそれは最高だと思う。種子や微生物なども面白そう。木簡は板のまま出てくるものだと思っていたが、泥の中の破片、薄っぺらい削りカス、それをパズルのように絵あわせして文字を探していくとはびっくり。文字がわかれば、今までの疑問が多少は解決する、意味がわかり、日時がわかり、固有名詞がわかり、あれはやはり本当だったとか、あの日時は間違いだったとか、こういう研究はスリルに富んで面白そう>正倉院文書(もんじょ)は、正倉院宝庫に伝わつた一万数千点の奈良時代の古文書である。8世紀の古文書がこれほど大量に残つたのは、世界的にも稀有なことだ。<オレ：中身は写経だという。写経とは仏典・お経を写すことだと思っていたが、ちがうようだ。戸籍、税などのことが書かれた事務帳簿、諸国からの文章、中央官庁の文章もあるらしい。なら読み解けば当時の社会、歴史がどんどん解明されると思う。疑問に思うことはすでに千年以上も経っているのに、これらの古文書がなぜ調査しきれなかったのか、それともそれほど複雑なのか。>聖武天皇はついに天平17年5月11日平城京に移動した。聖武天皇は天平12年10月に平城京から「大行幸」に出で以来、じつに約4年半ぶりに平城京にもどつたのであつた。内裏を御在所とした諸司の官人たちも、それぞれの官庁に落ち着いた。<オレ：聖武天皇は恭仁宮を造り、紫香樂宮に遷都、そこに大仏を造ろうとしたが、反対派におされしかたなく平城宮に帰つたのか>平城京にもどり、大養徳国(やまと)の金光明寺(東大寺のこと)に盧舎那大仏を造ることにした。金光明寺は皇后宮職や造東大寺司という中央官司がその造営に全面的に関わつてきた。そこに本尊として盧舎那大仏を造る、当時の貴族層は平城宮なら同意できた。当時の貴族層は恭仁宮、紫香樂宮、難波宮はいずれも、特定の政治勢力との結びつきがよいため、平城宮でお互い妥協しあつたのだろう。<オレ：本を読み終わって、この当時、四つも都があつたこと、信楽に大仏を造ろうとしたことがおぼろげにわかつた。「本当にまだまだわからないことがいっぱい」という一つ一つが埋められていくのを見守りたい。

展覧会が終わって一ヶ月が経った。やっと絵を描きだした。最近の展覧会では、展覧会前の一ヶ月、また終わってからの一ヶ月、なんだかしっかり絵が描けなくなってきている。昔は直前まで絵にかじりついていて、最後まで描いていた、それこそ青筋を立て悲愴な気持ちで描いていた。一週間の展覧会期間中は「ちょっと行きませんか」なんていう誘いに気軽に喜んで同道した。酒の日が続くといささかくたびれるが、若さでのりきった。終わるとすぐになんじやかんじやと仕事が入り仕事に次の絵にと回転していた。歳をとって動きがスローモーに、ひとつのことをじっくり、生活習慣が変わったこともあるが、考え検証するに、展覧会の前後、その準備その後始末にずいぶん時間を使っている。若いころに「パンフレットがあれば 画集があれば 説明用印刷物があれば」と憧れていた。当時でも資金をかけた展覧会ではそんなものが普通にあった。会場に行くと受付嬢が、無料の冊子を配っていた、壁には大きなパネルにきれいに書かれ説明書、画集も売っていた、こんなものがあれば素晴らしいだろうとあきらめていたが、今やこれに近いものができるようになった。絵が載ったDMはがき、A4 サイズ両面フルカラーのカタログには数点の絵を載せる、展覧会の壁には絵の説明書を描いて貼り付ける。このような作業が、パソコンの多少の技術で簡単にしかも安価にできる。当時はまさかこのオレが、そんな器用なマネができるとは思もしなかった。

今日も筆を走らせて描いてきた。なんとなく気分のいい描きあじそのあとあじ、モノづくりにとって最高の気分、これにまさるものはない。展覧会の会場や、アトリエでも「絵を説明してくれ」といわれると、しどろもどろ、話にならない。「スカッとかける、スツと筆が走る」と擬態や擬音は出るのが「いかなる構成で そのコンセプトはこれ」というようなことをなかなかかっこう良くは説明できない。えらそうに会場や、アトリエで話してはいるが、その実、自分の絵、自分の仕事は語れない。ただいえることは、なんとなく気分のいい描きあじそのあとあじ、という感覚、説明しがたい感覚だが、こういう感覚はめったにこないけれど、くればまず間違いなくほれほれする絵ができあがっている。まして午前中の時間にこの感覚がくれば、これは間違いがない。寝る前に大いに興奮をして、朝起きるとがっかりということは過去に何度もあった。弱い70歳まじかにもなり「いやあ 絵 まよっています」とは聞かせたくない、大きな声ではいえないが「本当の話 決まらない わからない どうすりゃいい」と大きな声でうなだれる。先日もできあがった、うまくいった、とサインを入れ壁にかけていたが「どうもかたい おもわしくない もうひと筆入れたい」と歯軋りしつつもまだそのまま壁にかけてある。皆さんにはわからないことだけれど、絵の具の堅さ、油や水で絵の具を薄めるが、その粘度が気になる。「堅い方がいい」と思うときは毎日堅い粘度で描いている、その粘土がはなについてくるが、やめずそのまま続ける。また反対にしゃぶしゃぶ（これをオツユ描きという）が気に入りますとこればかりに走ってしまう。「おまえは 右に行ったり 左に行ったり 上や下を 見ないのか」と叱責されそうだがこの辺りが、愚鈍なのかもしれない、オレの絵かき人生こういうことの繰り返しである。

レコーダーを持ちながら安威川河川敷を走っている。4月の下旬に入った今、陽の光が暑い、半袖Tシャツ、身の出た部分が熱い痛い、夏の強烈な陽の光とは比べ物にならないくらい弱いけれど、先日までの寒さを思えば、この光は皮膚に痛い。「顔の黒さが 下品だ」と毎年キヌさんがいう。アトリエの床が薄いこげ茶色だ。汚い色だと思っていたが何年前か前、床に手をつかえたときにまじまじ見入ってびっくりした「手の甲の色と 床の色が 同じではないか オレの皮膚は こんなに 汚い色なのか 顔も 手も 足も こげ茶色なのか」と再認識、これは汚い。

安威川の河川敷、土手、中ノ島、なんだか急に騒がしくなってきた、それぞれの命がイキイキ動き始めた。秋に刈ったままの草がどんどん伸びてきた、もうオレの腰あたりまで茂ってきている、花が咲き始めた。白、黄、紫、ほとんど小さい花だけれど咲き始めた、かのカラシナ君もまだまだ満開ではないけれど咲き始めた。花が咲くと虫がいる、花に群がる、何種類かの蝶、白に、アゲハに、黄色、蜂もいる、小さい虫も飛び回っている。そういえば小鳥も多い。ひばり、こいつは知っている、雀より少し大きいがすばしっこい上り下り、ハネに赤茶が混じっている、くちばしの黄色いのはムクドリ、ヒヨもいる、探鳥のおじさんたちも、まもなく現れるだろう。

熊本で地震「熊本市 震度7」というニュースが流れた。17年前の阪神大震災が震度7だったと記憶しているが「これはすごい地震だ」と思った。今回の熊本地震はだらだら長く続いた。ラジオのニュースで最初震度7がで、すぐに余震が続いた。二日後により大きなヤツがきた。まず大きなヤツがくれば、徐々に余震の揺れが小さくなり一ヶ月もすればおさまるが普通の地震だと思っていた。「最初のは本震ではなかった あれは余震だった 二度目のが本震です 九州のこのあたりの地震活動は まだまだ 活発です」「まだまだ 活発」というようにぐらぐら長く続いた、ケタイな地震だ。

歴史学者が「400年前に 同じような地震があった 同じように次々 起きているのには びっくりした」というニュースが流れた。慶長大地震 1596年 起こった一連の地震と同じだという。<9月1日慶長伊予(愛媛県)地震はM7 寺社倒壊><9月4日慶長豊後(大分県)地震M7~7.8 死者700人><9月5日慶長伏見地震M7 死者1000人以上。伏見城の天守や石垣が損壊、余震が翌年春まで続く>この度の地震がはまず4月14日(M6.3)が熊本で起こり、4月16日により大きなヤツ(M7)が同じく近いところで起こった。これで関西に来れば歴史学者のいうとおりだけれど、二十日ぐらいたった今、なんとなくだらだら地震も収束してきたようだ。関西に来なくてよかったと胸なでおろしている。いずれにしても阪神淡路が17年前、東北が5年前、大地震が多い。

地球のことを考えている先生方にとって、100年ぐらいの時間の誤差はあたりまえ「100年 1000年ぐらいの後に大きな地震が 起きます」なんて説明するが、一般市民はまず明日のことが知りたいもので、先生方をマスメディアに登場させ彼らを四苦八苦させている。「占い師でもあるまいし 明日のことはわからない」といえばいいのに。

TVの画像、ニュースで映し出される街を見ていると、最初の地震では震度7にもかかわらず被害が少ないと思った。熊本城の天守閣、屋根瓦がずれ、しゃちほこがなくなり、石垣が所々でつぶれていた、橋が落ち、土砂崩れがあり、建物もいくつか壊れていたが、カメラが横を向くと、街の道路も建物もまだまだしっかり建っていると思っていた。二日たち四日たって出てくる画像は、廃居の街、残骸の街へと変貌していった。TVカメラがそういうところを選び出して撮っているのか、本当に町全体が崩れているのか、この目で見ていないのでわからないが、だらだら揺れであらゆるところが徐々にきしみ、ついにひっくり返ってしまった、とうとう潰れてしまった、ということなのでしょうね。そう、あの熊本城も最近見た画像では、天守閣の瓦が全部落ちていて、石垣も最初よりたくさん崩れている、石垣の上に建つ櫓も石垣が崩れかろうじて姿はあるが、それこそ“素手のひと突き”でぐらりと全壊しそう。あれを復元するには膨大な資金と歳月がかかりそうだ、残念だけれど大変だ。

人生50年というが、災害は毎年日本のどこかで起こっている。地震・雷・火事・オヤジ、それこそ狂牛病で牛を穴に埋めていたのも熊本だったのでは。災害の多さが日本だけなのか、世界のどこにいても同じようにあるのかは知らないが、オレの廻りで、子どものころから知っているかぎり、災害で亡くなった、大きな事故に巻き込まれたという人はいない。今回の熊本地震では100人ぐらいの人が亡くなったと聞いているが、阪神大震災のときは5000人が、東北の時は20000人ぐらいが亡くなったと聞いている。

ヒザの話：5年ぐらい前に膝痛を知った。朝起きると歩けない、足が曲げられない、隣の整形外科に飛び込んだ。レントゲンを採ると、機能的には問題は無い、たんなる過老、関節の水を抜き痛み止めを飲めばすぐに治るよ、と注射をされた。そのときは簡単に治ったが、それから2年間ぐらい、膝痛に襲われ、山にはもう行けないかと嘆いていた。夏でも冬でもタイツをはくように思いたち実行してみれば、それ以後きつい膝痛は無くなった。ところがこの冬はよろしくない。夜に冷えるのか、少し痛い、きつくはないが痛い、足全体が冷えている、部屋にいても布団の中でも冷えている。シップを貼る、カイロを貼る、と工夫をしたが治らない。たまたまキヌさんと飲んだ時に聞くと、彼も最近きつい腰痛が襲ったらしい。何年か前に仕事ができないぐらいひどい腰痛を体操で克服したと喜んでいたら、今回はどうにも治らなかつたらしい。血めぐりをよくする薬を飲んでみると、すぐ快方に向かつたらしい。漢方でいうところの「気・血・水」の中の「血」だと思いつきその薬を飲んだそうだ。そういえばオレも、なんだか寒い、なんだか冷たい、若いころのように身体が温かくない、これは本当に“血”かもしれない。次回その薬をもらうことになっている。大変な災害の後に、地震の痛みのお話で失礼。